

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版



紅き瞳の  
ヴァンパイア  
CURSOR EYES VAMPIRE

小説 山河 勇

挿絵 てんまそ

第一章	魔を狩る者	006
第二章	過去と現在	026
第三章	対決	042
第四章	陵辱の夜	123
第五章	真なる覚醒	238

## 登場人物紹介

Characters



### シルヴィア＝エスクルス

人間に害なす怪物を狩る魔物ハンター。かつては強大な力を持つヴァンパイアだったが、現在は人間の肉体に封印されている。プライドが高く、偉そうな話し方をするが本人に悪意はなく、根は素直。

### ひびのあさか 日比野朝霞

シルヴィアの封印を司る退魔師。まだ少女にもかかわらず、かなりの使い手。飄々とした性格で、主従の関係にあるシルヴィアに対しても友人のように接する。

### レイドリック＝ゼノス

シルヴィアと浅からぬ因縁を持つヴァンパイア。

「うふふ……鳴く声まで可愛いわ。気持ちいいんでしょ？ 素直になってみなさい、そうすればもっと気持ちよくなれるわよ……」

長い舌で耳を愛撫しながら囁いてくる蛇女。だがその一言がシルヴィアの意識に火を灯した。それは下僕げぼくごときに感じさせられてはいない、というプライド。惑わす様な口調に負けまいと、頭を振って全身の気力を呼び起こす。

「違うッ!! そんな、そんなことは絶対にない!!」

それは自分に向けた叱咤の声でもあった。一度は快感の波に呑み込まれそうになっていた意識を己の力で呼び戻す。ギリッとかみ締められた鬨、紅い瞳が再び意志の輝きを宿して眼の前にはいない敵を睨みつける。

だがそんな折に、不意にその視界へと入ってくる影があった。

背中に漆黒の翼を持った黒髪の少年。少し離れて彼女の様子を見守っていた彼が、片手を頭上に渡された樹にあてて覆いかぶさる様に覗き込んできている。鋭い牙を覗かせる口が涼しげな笑みを形作り、言葉を発した。

「そいつの言う通りだぜ。へたな意地なんぞ張るのはやめたらどうだ？ その方がお互いにも楽しめるっていうのによ」

その台詞に返ってきたのは苛烈なまでに険しい眼光だった。言葉はない。ただひたすら、何物にも負けぬという鋼の如き意志を感じさせる、紅い輝きを宿した瞳。だが少年はそれ

すら予想していたかの様な余裕の表情でフッと笑う。

「やれやれ。素直じゃねえな、まったたく……」

などと言う台詞もわざとらしい演技がかかっている。彼がその言葉とは裏腹に、この状況を楽しんでるのは一目瞭然だった。

その右手がシルヴィアの眼の前で軽く翻る。と、またもや手品の様にその指には一本の試験管が出現していた。中にはかすかに白みのかかった半透明の液体が入っている。

「そんなお前にプレゼントだ。こいつは効くぜ。なんせ魔族にも効く様に特別調合した魔法薬マジックポーションだから……」

眼の前でゆつくりとその試験管を振りながら言うレイド。半透明の液体がゆらめく向こうで、こちらを見つめる紅い瞳が妖しくきらめいた。

「や、やめる……!」

シルヴィアの言葉を無視して試験管がゆつくりと傾けられてゆく。その口の端から流れ落ちてゆく液体。見かけよりも粘性が高く、とろりとしている。それが自分の胸元に落ちてゆくの、彼女はただ眺めているしかなかった。

ぼたりと最初の一滴が肌に触れる。

火照った身体に新鮮な、冷たい液体の感触。それだけで身体がピクンと反応してしまう。胸元からはじまって右の乳房、続けて左側へ……まるでケーキにシロップを振りかけるか

の様に途切れることなく、細い軌跡を描いて液体が垂らされてゆく。

(あ、甘い……香り……)

蜂蜜を連想させる甘い芳香。それを嗅いでいるだけで意識がふんわりと和んでいきそうな不思議な香りだ。しかもその効果は速やかに、はつきりと表われていた。ぽうつとした感覚が強まっているのに自分でも気付かない。最初は冷たいと感じられた液体の感触も、いつのまにかジンとした感覚へと変化して肌に染み込んできていた。

ぬるり……。

「くうあああ——ッ!!」

最後の一滴が落下するとともに蛇女の手が動いた。スーツに包まれたその腕も粘液にまみれているが、それをまったく気にした様子は見せない。むしろ自分の手についた粘液を潤滑油の様に使って、それをさらに広げようと撫で回してくる。肌理細やかな肌の上に広げられてゆくとろりとした液体。さっきまでの肌が擦れる摩擦感とはまた違った、石鹸が擦りつけられる様なツルリとした感触。蛇女が馴れた手つきで、掌の中におさまる乳房を餅でも練るかの様に自由自在にこねくりまわしてくる。

胸全体をヌルヌルと濡らす潤滑油を擦り込ませる様な動き。そのかたわら、ツンと尖りきった先端の突起を指で弾き上げてくるのだ。魔法薬によって敏感になった肌と、その肌が擦られることによる刺激、それは胸の内と外が燃え上がっているかのように感じられた。

「くうっ、うっ……ううう——ッ!!」

より激しさを増した責めに、必死に声を押し殺して耐える金髪の少女。だが、ただ耐えているだけでは一向に状況は好転しない。体内で渦巻く熱い官能の嵐はその激しさを刻一刻と強めており、そして外においても新しい刺激の兆候が迫っていた。

胸元から溢れて身体の表面を流れてゆく、冷たくも熱い液体の流れ。胸部分からおへそを経て下腹部へと伝わってゆき、制服のスカートや下着にまで染み込んでゆくのを感じられる。衣服がじつとりと濡れて張り付く感触が広がってゆき、なんとも気持ちが悪い。

と、そこまで感じた次の瞬間、不意に少女が眼を見開き、身体を硬直させた。

「あ、ふあああッ!?!」

ビクンと一際激しくその肢体が跳ねる。

じわじわと広がってゆく感覚が股間に達した時、これまでにないほどのゾクゾク感が背筋を貫いたのだ。胸への刺激にばかり気をとられ、いつのまにかそこにわだかまっていた熱い塊。それが一気にその存在を露わにしたのだ。

股間に突然灯された官能の炎。その大きさは一瞬、思考を止めてしまうほどだった。

(あ、あそこが熱いッ……な、なんなんだ、これは……ッ)

刺激を求めてジンジンと激しく疼く股間。それをなんとかしようとして手を伸ばしたくてもそうすることができない。そのあまりのもどかしさに、恥も外聞も忘れて無意識に腰をく

ねらせる様な動きをしてしまふ。その様子を見た蛇女が笑った。

「あらあら、そんなに腰を動かしちゃって……そこも触って欲しいのかしら？」

そんな屈辱的なことを認める訳にはいかない。ここは全身に力を込めてぐつと堪える。

「そ、その様なことあるはずがない！ 馬鹿も休み休み言えッ！」

だが股間に灯された官能の炎は刻一刻と大きくなってくる。ブルブルと震える身体、意識して抑えていてさえ腰が刺激を求めて動き出してしまいそうだ。

（ダメだ……このままでは……なんとか、なんとかかしないと……！）

そう考えている内に、一時は本気で我を忘れかけてしまったほどである。だがふと気がつくくと、眼の前に黒い影がヌツと立ちはだかっていた。逞しい肉体にそれを覆う銀色の獣毛。つい先程、劇的な復活を見せた人狼だ。その姿がじりじりと近づいてくる。

「大分つらいご様子ですな。ここはひとつ、私がお手伝いして差し上げましょう。……先程のお礼も含めましてね……」

その言葉を聞いて、耳元で蛇女がクスリと笑う声が聞こえた。続いて身体に絡みついている植物の蔓がズルリと動き出した。両脚にしっかりと巻きついていてる部分が、まるで縮むかのように蠢いて左右へと引っ張ってくる。

「く……な、なにを……する……やめる……ッ！」

すでにその行為に抵抗するだけの余裕など残ってはいない。言葉で抗うことしかできな





かったがそれをやめる気は毛頭なかった。どんなに身体を汚されようとも心でそれを認めることだけは絶対にしたくない。胸を罵られ、さらに秘部を大きく晒されるといふ恥辱を受けつつも、シルヴィアは必死になって耐え続けていた。

大した抵抗もなく左右に大きく広げられてゆく両脚。細く引き締まって見事なラインを見せるふくらはぎから太腿、そしてその付け根にある白い布に覆われた秘所までが見る間に露わにされてゆく。その両脚の間へ潜り込む様にかがみこんでくる人狼。最も恥ずかしい場所を至近距離で見つめられているという感覚に恥ずかしさが突き上げてくる。クンクンと匂いを嗅ぐ様な仕草を見せながら人狼がつぶやいた。

「ほう、これは綺麗なものですな。しかもこんなに濡れておられるとは……。胸への悪戯が余程お気に召した様で……」

少女の顔が恥辱で朱に染まる。確かに人狼の言う通りだった。秘所を覆う純白の布地はじつとりと湿り、大きな染みができている。そして白皙の肌にびったりと張り付いて、ぶつくりとした恥丘はもとよりその下にある性器の形さえ浮かび上がらせていた。

「ば、馬鹿なことを言うな！ それはレイドめの魔法薬が染み込んで……！」

やつきになって否定しようとするシルヴィアの言葉を、人狼の低い笑い声が遮る。

「魔法薬ですと？ いやいや、この濡れ様はともそれだけとは思えませんぞ。……まあよろしいでしょう。本当か否か、こうすればすぐにわかることですからな……」

その言葉とともに、なにかがグッと押し付けられた。薄い布地越しにはっきりとわかる、熱く弾力性に富んだ物体。それもまた湿っているらしく、クチュリという音までが聞こえてくる。

「はああうう——ッ!!」

ぬるりとした舌で触れられた、たったそれだけのことなのに、女性器がビクンと大きく脈動した。熱く疼いていた部分に触れられた刺激、それに伴うぬるりとした気持ちの悪さが広がってゆき、手足の指先に至るまでビクビクとうち震わせる。しかもそれだけでは止まらない。そのままズルウッという音を立てて弾力のある肉塊が動かされると、その感覚が立て続けに上乘せされて襲いかかってくるのだ。一回、二回……舌がゆつくりと秘部を舐め上げる度に身体を仰け反らせ、声にならない声をあげる金髪の少女。その声も次第に高くなってゆく。が、不意にその刺激がやんだ。激しく喘いで一息をつく少女を人狼が低い笑い声とともに見上げてきた。そしていかにも美味しそうに舌なめずりをする。

「ふふふ……いかがですか、これでもまだ感じていないとおっしゃいますか？」

答えはない。回を重ねる度に高まってゆく快感に、言い返すだけの余力は残されていない。かっただのだ。険しく敵を睨みつける紅い瞳、険しい表情ながらも上気して、どこか惚けたような様子がそのことを物語っている。人狼がニヤリと笑って舌なめずりをした。

「おやおや、お答えはなしですか。ですがまだまだこれからですぞ……」

言つて再び顔をうずめる人狼。その手の指が、いまではグッシヨリと濡れそぼったシヨ  
ーツの股布部分にかかるのが感触でわかつた。

「う……ああ……や、やめっ……はああっ!!」

朦朧としつつもせめてもの抵抗として、腰をくねらせる金髪の少女。だが相手はそんな  
ことなどまったくおかまいなしに行為を進めてゆく。

長い爪の先端が器用に布地の端を引つ掛けた。そしてゆっくりと横にずらしてゆく。

「——ッ!!」

ふきかけられる呼気までが敏感に感じ取れた。これまで誰にも見せたことのない女性器  
が直接、敵の目に晒されている。それもレイド本人ではなく、奴の配下の獣人如きにだ。  
そう考えただけで恥ずかしさが他のすべてに勝り、恥辱が全身をうち震わせる。

布地の下から姿を現したのは、淡い金色の茂み。そしてそこから下に向かって伸びる一  
本の秘裂。それはさながら熟しかけた果実の様で、いまだ一本のラインにしか見えないも  
のの、かすかに開いた割れ目からは赤く充血した媚肉が姿を覗かせており、とろりとした  
液体にまみれて艶々としたてかりを放っている。未成熟ながらも、この身体が充分大人で  
あることを示す様な生々しい女性器だった。しばしの間、眼を細めてその部分に見入つて  
いた人狼だが、やがてじつくりと獲物を味わう様にその舌を伸ばす。

ちゅくつ……。

その言葉を聞いたシルヴィアがギンとした目つきで睨みつけてきた。

「ば、バカにするな！ こう見えても私は……あ、なっ、なにをする……っ！」

そんな彼女の抗議を聞き流しつつ身を起こし、少女の姿勢を変えようとするレイド。

自分の片脚が高く持ち上げられ、大きく股を開かされようとしているのが感じられた。

「や、やめろっ！ そんな、そんなことをしたら……！」

半ば拘束されている身では抵抗らしい抵抗もできない。短いスカートが完全にめくれあがり、布の下に隠されていた秘所を露わにするのをただ眺めているしかできなかった。

濡れそぼってヒクヒクとひくつき、いやらしい蜜を湧き出させている女陰。

恥ずかしいのもちろんのことだが、それと同じくらいそこが疼いていることも意識せざるを得なかった。一度は絶頂の寸前までいかされつつも、そこで寸止めになってしまった性欲がそのはけ口を求めている。あとほんの少しの刺激さえあれば達することができると、自分だけではどうしようもない。それだけに一層もどかしさがつのり、疼きをより強く感じさせる。だからといって敵になんとかしてもらおう様に頼むのは、どうあっても彼女のプライドが許さない。理性と本能の果てがない板ばさみ、その悶々とした思考を破つたのはまたしてもレイドの声だった。

「さて、それじゃそろそろ最後の締めといこうか……」

ずいとその身を乗り出して覆いかぶさってくる黒髪の少年。と、彼に抱えられた片脚に

なにかぬるりとした物が触れた。

「ッ!？」

ここに至ってはそれがなんであるか確認するまでもない。が、それでも眼をやらすにはいられなかった。

少年のはいた制服のズボンからヌッと突き出した物体。ドクドクと脈打つ熱い肉の塊はまぎれもなく男性器である。初めて見る訳ではないが、だからといって見ていて気持ちのよい物でもない。まして、それがいままさに自分を貫こうというのならなおさらだ。その瞬間を想像して身を固くする金髪の少女。それを見た黒髪の少年がニヤリと笑った。

「なんだ、その反応は。別に初めて見る訳じゃないんだろ？ 安心しな、痛くはしねえからさ」

レイドがそう言った瞬間、肉棒がシルヴィアの秘裂に触れた。

「ああああッ!!」

媚肉同士が触れ合う、蕩けていく様な快感。ゾクゾクとした感覚が全身を駆け巡る。思わず高い声をあげて身体を仰け反らせてしまった。

そのまま秘裂に沿って擦りつけられる肉棒。互いの媚肉が絡み合い、いやらしい水音を立てる。

やがて少年がやや腰を引き、角度を少し変えた。股間の秘裂に、やや尖り気味の熱い肉

塊が押し付けられているのがわかる。屈辱感と期待が入り混じって心を走り抜けた。

(くそっ……:よりによってこいつに……でも……でも……こんな……熱い……)

クチュクチュと音を立てて肉棒の先端が秘裂を軽く抉り上げる。やや焦らす様な動きに自分でも意識しない内に腰が動いてしまっていた。

「くっ……ふうう……ん……」

荒くなってきた呼気に合わせて甘い喘ぎ声が漏れる。それが聞こえたのか、笑いを含んだレイドの声が聞こえてきた。

「ふふ、自分から腰を動かすほど欲しいのか。いいだろう。それじゃいくぜ……」

否定の言葉を返す暇はなかった。次の瞬間には硬く熱い肉棒が肉の花弁を割って入ってくる。敏感すぎるほどになった感覚がそれをはつきりと感じていた。

入り口の媚肉が搔き分けられ、キュッと締まった膣の内壁が侵入してくる物体によって引き伸ばされてゆく。その硬い様で弾力に富んだツルツルした感触。膣全体がまぎれもない快感によってうち震える。

「あ、ああ、あくうううう——ッ!!」

シルヴィアの口から声が漏れた。ついに貫かれてしまったくやしき、抵抗しきれなかった無念、意思とは無関係に感じてしまう身体、様々な思いを内包した呻き声である。

抵抗は一度だけあった。強引にそれが押し貫かれ、胎内でなにかがプツリと切れる様な

感覚。一瞬、鋭い痛みが全身を走り抜けたが、それはすぐに圧倒的な快感の渦に吞まれて消えてしまった。あるいはこれも肉体に対する干渉の一部だったのかもしれない。が、そんなことはもうどうでもよかった。肉棒が入り込んでくるにつれて快感のボルテージが飛躍的に高まってゆく。それは肉棒の先端がズンと最奥にまで達した時に最高潮を迎えた。

「ひいあああッ！ んあああああ——ッ!!」

意識が、視界が真っ白に染まる。全身が、手足の指先に至るまでが腔から発する熱い感覚に満たされ、ビクビクとうち震えた。

「うあ……あ……ああ……」

半ば麻痺した思考を占めているのは驚きと恥ずかしさ、それにくやしさだった。色々と下準備がなされていたとはいえ、初めて男性に貫かれたというのにこんなにも快感を感じてしまうとは。しかもその相手がよりにもよって長年の宿敵、レイドである。自分の身体はこんなにもいやらしい部分を秘めていたのか。そう思うだけで恥ずかしい。だがそれ以上色々と思い悩んでいる余裕はなかった。レイドが再び腰を動かしはじめたからだ。ズルウツと肉棒が一息に引き抜かれてゆく。急速に収縮してゆく媚肉が快感の悲鳴をあげた。

「あひッ！ だ、ダメだ、いまは……いまはまだ……ッ!!」

全身をくねらせ、喘ぎ悶える金髪の少女。肉棒のエラ状になった部分が内壁を引っかけていく様な感覚。初めて他者との接触を感じたばかりの媚肉にこの刺激は少々強すぎる。



「どうした？ まさかもうイっちゃった訳でもないんだろ？ いい締め具合だぜ」

やや荒い息をつきながらレイドが言う。それでも腰の動きを止めようとはしない。その紅い瞳は妖しくゆらめく光を放ち、彼もまた強い興奮状態にあることを示していた。

引き抜かれる寸前までいった肉棒が再び深く打ち込まれる。今度は角度をやや変えて、膣中の別の面を擦り上げるように。そして子宮が突き上げられるとまたもや膣全体がゆらぎ、全身へ快感の波が広がってゆくのだ。

「ひあっ……あっ、くうう……んうっ……はあああッ!!」

一息に奥深くまで貫き、ゆっくりと引き抜いてゆく一連の流れ。最初はあまりに刺激が強いせいか、一突きごとに媚肉がギュウッと限界まで締まり、動きを中断させていた。

だがシルヴィアの膣が慣れてくるにしたがって硬いだけだった膣の内壁もほぐれ、その動きも少しずつスムーズになってゆく。それにつれて次第に新しい快感も開発されてきた。文字通り胎内をかき回される感覚。膣の内壁がひっきりなしに伸縮を繰り返し、内臓が何度もその位置を変える。お腹の中がドロドロになった様な灼熱感。

慣れとは恐ろしいもので、最初は一回ごとに意識が碎け散るかと思われたこの刺激も、純粹に快感として身体が受け入れはじめており、そして一度その味を知ってしまうと、もう止められなかった。

(ううっ……こんな馬鹿な……どうして……どうしてこんなに気持ちがいいんだ……)

ジュプ、ジュプ、ジュプ……。

結合部から聞こえてくるいやらしい水音ももう気にはならない。いや、むしろ聴覚を通じて興奮を高めている。際限なくどんどん高まってゆく快感、媚肉に絡みつく熱い肉棒もその硬さをさらに増すのが感じられ、レイドの方も同様であるとはつきりとわかった。

「どうだ、俺のモノは、気持ちいいか？ はつきり言ってみな……！」

レイドが熱っぽい口調で語りかけてくる。もうこの相手が宿敵であることなどどうでもよかった。ただひたすら快感を求めることしか考えられない。

「あ……くううっ……き、気持ち……いい……気持ちいいッ!!」

そう言うとき一際ゾクリと強い快感が背筋を駆け上がる。いつしかシルヴィアの方もレイドの動きに合わせて腰を動かすはじめていた。それに後押しされる様に意識が痺れ、気が遠くなってくる。もう限界が近いと感じられた。

「ああ……も、もう……また、またなにかくる……ッ!!」

ゾクゾクと駆け上がってくる感覚が意識をどんどん昇り詰めさせてゆく。それに合わせるかの様にレイドも動きを早めてきた。グチュグチュと淫液同士が絡まり、滴る音が大きくなってくる。

「くっ……俺もだ……！ いや……いいか……ッ!!」

これで最後とばかりに腰を強く突き上げる黒髪の少年。深く打ち込まれた肉棒が一際強



く子宮口を挟り上げた。少年の全体重がその部分にかかる。

「ッ!! うあつ、あ、あああああ——ッ!!」

全身がビクビクとうち震え、硬直する。意識が白一色に染められた。一際強く肉棒に絡みついた媚肉にドクンドクンという脈動が伝わってきた。限界まで締め上げられながらも激しく胎内で跳ねるのが感じられる。

ドクッ、ドクドクッ……!!

次の瞬間、灼熱したかの様に熱い液体が肉棒からほとぼしり、胎内を満たした。互いに絡み合った媚肉の圧力に押されて結合部から溢れ、ポタポタと床に滴り落ちてゆく。

「はあーっ、はーっ、は、あ、あああ……」

身体中に満ちる、絶頂感と倦怠感が入り混じった様な感覚。激しく息をつきながらシルヴィアはしばらくの間、呆然とそれに身をまかせていた。

ズルウッ……。

「んくうっ……!」

やがてゆっくりと肉棒が引き抜かれてゆく。その刺激に身を震わせる少女の秘裂から、白濁した液の入り混じる淫液がコポリと溢れ出た。

彼女の腰を抱く様にしていたレイドがスッと身を引く。するとシルヴィアの背後で彼女を台座へ張り付けにしていた粘液の塊が、急にその吸着力を失ったか様だった。



身を乗り出す様にして叫ぶシルヴィア。だが彼女の四肢も逞しい腕によってがっしりとつかまれている。次の瞬間、逆に手足を引っ張られて引き戻されていた。なにか硬い毛のびっしりと生えた身体の中にドサッと落ち込む。

「さて、見物はここまでだ。次は君の番だよ。レイド様が仕込まれたというその身体、たっぷりと味わわせてもらおうか……」

視界の中に一体、また一体と獣人の影が入り込んでくる。その隙間から、自分と同じく朝霞にも何人もの獣人が覆いかぶさってゆくのが見える。やがてその姿は完全に視界から外れてしまった。背後から彼女を抱きすくめていた奴がその両手で乳房をわしっとつかむ。

「ひゃうッ!!」

途端にジンと広がる甘い刺激、思わず声が漏れてしまう。

「さすがはレイド様、こんな小さな胸なのに大した感度だ。いや、小さいからこそ敏感なのか……?」

冷静に分析する様な声。しかしその内容にはカチンとくるものがあつた。

「ち、小さい、は余計だ……! あ、くうっ、くうう——ッ!!」

尖りきった乳首をコリコリと弄られると蕩ける様な甘い官能がぶりかえし、声を出さずにはおられない。身体をくねらせて身悶える。

「ふふ、意外と余裕があるな。しかしこうされればどうかな?」

その声に閉じていた眼を開けると、いままさに股間に顔をうずめんとする獣人の姿が見えた。黄色と黒の縞模様、虎獣人の様だ。

「そうだね。ここもグッシヨリと濡れているよ。すごく美味しそうだ……」

外見にそぐわない若い声でそう言うと、一息に股間の秘裂へとむしゃぶりついてきた。

「あ、ひいあああああああッ!!」

ザラザラとした獣の舌が秘裂全体を舐め上げる。ビリビリと性器に電気が走る様な衝撃に悲鳴をあげずにはおられない。そのままピチャピチャと、立て続けに音を立てて舐めてくる虎獣人、胸へのしつこい愛撫と重なってあつという間に達してしまいそうになる。

「だ、ダメだッ、そんなに、そんなにされたらもう……あつ、あつあつあ、あ——ッ!」  
激しい絶頂感が全身を駆け巡る。全身がビクビクとうち震え、股間の秘裂がプシャアッと潮をふいた。

「これは……すごいな。想像以上だ」

背後の声があった。その毛むくじやらの手はいま、胸だけではなくお腹や太腿、全身を撫で回している。

「うん、こつちもやっぱり美味しいよ。いくら舐めても溢れ出てくる……」

チロチロと舌先で秘裂周辺をくすぐり回しながら虎男が言った。その後にもなにか言った様なのだが、それは周囲であがった数々の叫びにかき消されてしまう。

「オマエタチダケズルイ、オレニモヤラセロ……」

「そうだ、こつちにも回せ！」

「慌てるな、順番だ、順番……」

四方八方から様々な物が伸びてくる。それは手であつたり舌だつたりした。もう自分がどんな状況におかれているのかわからない。胸にむしゃぶりついてくる小柄な奴がいた。両手で乳房をつかみ、乳首を吸い上げてくる。股間に殺到しているのはもはや例の虎男だ。けではなかつた。限界まで両脚が広げられ、複数の舌が秘裂を舐め、弄り回しているのが感じられる。

それだけではない。身体中、ありとあらゆる所に獣達の存在が感じられた。おへそまわりに太腿、果ては手先から足の指先に至るまで舌や指が這い回り、刺激を与えてくる。触れてくる舌や指なども、ザラザラしたり、ツルツルとしていたり、果ては毛むくじやらだつたりと多種多様だ。すでに全身が性感帯の様になっていたシルヴィアにとつてはとても耐えられる物ではない。

「ひいいイイッ!! だ、ダメえッ! そんなに一度に……うあああああ——ッ!!」

もう自分の身体が自分の物でないかの様だつた。絶え間のない絶頂、立て続けに襲ってくる快感の波が脳をゆるがし、欲望の限り彼女の身体をむさぼり尽くそうとしてくる。快感以外の感覚が消失し、眼もくらむ様な絶頂感の中で彼女の意識は真っ白になっていった。



「う……う……」

それからどの位経ったのだろう、ビクンと背筋を貫く快感に、ふと正気を取り戻す。しかし周囲の状況は相変わらず悪夢の様であった。両手両脚をしっかりと握られ、宙に浮かされた身体。眼の前にはおそらくは熊であろう、漆黒の毛と巨体を持つ獣人がいる。

「お、気がついたようだけ」

背後で別の声がそう言った。

「ふむ、では決めた順番通り、まずは私からだな」

眼の前の熊獣人が声を発する。先程一番最初に彼女を受けとめた、冷静な声だ。

「んあうっ……」

股間からの刺激に身体が激しく疼いた。見ると、熊獣人の股間から伸びている肉棒がシルヴィアの秘裂にあてがわれている。どうやらこの状態で彼女を刺激し、目覚めさせたのだろう。逞しい肉棒がビクンビクンと痙攣している。抵抗はできなかった。まるで一度全身の性感を刺激されたことにより、身体中が快感を求めて疼いているかの様である。思考の方も熱にうかされた様になってしまい、犯されるといふことにほとんど抵抗感を感じない。ゆっくりと手足を支えていた力がゆるめられてゆく。それとともに太く熱い肉棒が秘裂を割って入り込んできた。

「あ、はああああ……。お、大き……い……」

素直な感想がごく自然に口から漏れた。ジユププという水音とともにシルヴィアの媚肉の花弁は驚くほど柔軟に広がって太い肉棒を呑み込んでゆく。触手とも指とも違う、弾力と硬さを合わせ持った独特の感触。ツルリとした表面ながら吸いつく様な感触で、ピクピク痙攣しながら膣の媚肉と擦れてゆく。やがてズンという衝撃とともにその先端が子宮にまで達するのが感じられた。それでもなお、熊男の肉棒は全体の四分の一程度を余している。膣壁はいっぱいに広がり、まさにお腹いっぱいという感じだ。

四つん這いの形で両手両脚を踏ん張り、じわじわと染み渡ってくる快感に耐える金髪の少女。そんな彼女に熊男が声をかけた。

「どうした、動かないのか？ 自分で動かなければ欲しい快樂も得られないぞ？」

その言葉を聞いて精神がズキンと疼く。

(あ……欲しい……気持ちいいの……もつと……)

その欲望が疲れきった身体に力を与えたかの様だった。必死になって両脚を踏ん張るシルヴィア。その甲斐があつてか、少しずつ腰が持ち上がりはじめた。

「んッ……んくうううッ……！」

今度は逆に肉棒が引き抜かれてゆく。傘状になった部分が膣の内壁を引っかき、強い摩擦感を生む。太い物体が引き抜かれてゆく感覚、それはやみつきになりそうな快感だ。肉棒が完全に引き抜かれそうになった所でフッと力を抜く。そうすれば彼女の秘所は自ら

の体重でまた肉棒を呑み込んでゆくのだ。媚肉が掻き分けられ、子宮が抉り上げられるまでの過程が再現される。背筋を駆け上がる悪寒、脳天をゆるがす様な衝撃も一緒だ。

こうなるともう止められなかった。再び腰を上げて、また落とす。最初はぎこちなかったその動きが一連の絶え間ない動きになるまでに、さほどの時間はかからなかった。慣れてくれば力の入れ所も気持ちいいツボもわかってくる。

「あ……あ……気持ちいい……気持ちいい……!!」

熱にうかされたように腰を動かし続けるシルヴィア。極太の肉棒が胎内をかき回し、子宮を突き上げる、その感覚にすっかり夢中になってしまっていた。

そんな彼女を不意に誰かが背後から抱き締める。

「ひッ……!!」

丁度腰を落とす所であり、子宮にかかる重量が二倍になったシルヴィアが悲鳴をあげた。「あ、痛かった？ ごめんよ、先輩」

耳にかかる子供っぽい声。これはさつき股間を舐めまわしていた虎男の様だ。どうやら彼女よりも下級生らしい。

「おい、貴様の番はまだ後だろうが。勝手なことをするな！」

周囲から非難の声があがる。しかし虎男は抱きついた手をゆるめようとはしなかった。

「へん、順番がなんだい。先輩のこんな姿見せられて我慢できるもんか。それに……挿れ

る所はこつちにもあるじゃないか」

虎男の男根と思われる熱い肉棒がシルヴィアのお尻の辺りをまさぐる。それはお目当ての穴を見つけると一息に入り込んだ。

じゅぷぷぷ……。

「ひあッ!! くあああああッ!!」

金髪の少女が仰け反って絶叫する。虎男の肉棒は太さと長さにおいて熊男に勝るモノではなかったが、熱さと硬さにおいては同等だった。さらに虎男の肉棒には肉の逆棘さかぢりとでもいふべき突起が無数に生えており、それが引き抜く際に腸の内壁を激しく擦るのである。快感を感じる器官としてすつかり開発されきったアナルにおいて、そのゴリゴリとした感触はすべて快感へと転化されていた。さらに膣中には熊男の巨根が挿入されている。限界まで伸びきった内壁越しにふたつの肉棒が擦れ合う感触がさらなる快感を生み出す。

「くうゝ気持ちいい! やっぱ先輩の中は最高だぜ!」

そう言いながら激しく腰を動かす虎男。そのペースはかなり速い物であったが熊男との本来の交わりにおいても達しかけていたのである。それに拍車がかかっただけであった。

「あん! ああんッ! すつすごいッ! なっ、中でふたりのがッ! 一緒になって、ゴリゴリいつてえッ!!」

自ら腰をくねらせる様に振り、嬌声をあげながら昇り詰めてゆくシルヴィア。それに合

わけて二匹の獣人達の動きも早くなってゆく。

「だ、ダメッ!! もうダメエッ!! い、いくつ、いつちゃう、いつちゃう——ッ!!」

身体を弓なりに仰け反らせ、絶頂に達するシルヴィア。膣の、腸の内壁がギユウツとふたつの肉棒を締め上げた。

「ぐっ、ぐおおおっ!!」

「ダメえええっ! ひいああああああ——ッ!!」

ドクドクドクッと大量の精液が胎内にぶちまけられる。その熱さがじんわりと広がっていくのを感じながらシルヴィアは陶然とした面持ちで視線を彷徨わせていた。

ズルウツと熊男の肉棒が引き抜かれ、大量の精液がポタポタと滴り落ちる。それが止まる間もなく、早くも次の獣人が背後から彼女を刺し貫いていた。

「ひぐうっ! あうああああ——ッ!!」

金髪の少女が新たに悲鳴をあげる。しかしそれはもう苦痛の叫びではない。どんな相手だろうと感じるのはただ快感のみ、彼女の肉体はすでにそうなってしまうていた。

ズンズンと新たな相手の肉棒が膣中をかき回し、子宮を抉り上げる。だがそれがどんな大きさ、形をしていようともシルヴィアの膣はびったりと絡みつき、締め上げて最高級の快楽を相手に与えるのだ。

「さすがはレイド様自ら調教されただけのことはある……一滴残らず搾り取られた様だ」

一息ついた熊男が満足のため息とともにそう感想を漏らす。だが多くの獣人達はありあまるほどの精力を持っており、入れ替わり立ち替わり何度も彼女の膈中に精を放つ。回数を重ねるごとに彼らの理性はすりへってゆき、本能のままにシルヴィアへと襲いかかる様になってゆく。もう順番もなにもなかった。

「先輩……口で……口でしてくれよ……」

虎男がいまだそり立つ己の肉棒をシルヴィアの眼前に突きつけた。突然のことだったが立て続けの快楽にすっかり酔ってしまっていた金髪の少女は恐れる風もなく、うっとりとした表情でそれを呑み込んでゆく。

「ん……むう……うぐうっ……」

舌を絡みつけてしごき上げ、口全体で吸引する。

(す……ごおい……。こんなに硬く、脈打って……ゴツゴツしてるう……)

男性を悦ばせるテクニクはすでに身につけていた。それを駆使して愛撫を続ける内、程なく熱い精液がドクドクと口の中に放たれた。細い喉がそれを飲み下してゆく。

「ん……あはぁ……おいし……」

蕩けきった表情で最後の一滴を飲み干すシルヴィア。そんな彼女の様子を見た獣人達が我先にと己の肉棒を少女の鼻先に突き出す。それらの肉棒をなんの抵抗もなく次々としゃぶり続けるシルヴィアだった。



獸人達の獸欲は加熱していくばかりだ。彼女の周りに群がり、秘裂やお尻を貫くだけでなく、口や手はおろか艶やかな肌に肉棒をこすり付けてまで快楽を求めてくる。それに對し、できる限りの行為で応える金髪の少女。激しく上下に腰を振りながら口で肉棒をしゃぶり、細い指で遅くそそり立ったモノを握ってリズムカルにしごき上げる。

順番に、まんべんなくその行為は続いた。やがて周囲で一斉に放たれる大量の精。もう何人分の精を受けとめたのか、考えることもできない。

「ふああああああ……！」

うっとりとした悦樂の表情を浮かべながら大量の白濁液を全身で受けとめる金髪の少女。その姿は艶やかながらも淫猥な魔少女そのものに見えた。

ドクッ、ドクドクッ……。

口の中でまたひとつ、肉棒がビクンと震え、大量の精液を放つ。陶然とした表情でそれを飲み下し、次の肉棒を求めて視線を彷徨わせるシルヴィア。そんな視界の中に一際大きく、遅しい肉棒が姿を現した。

(ああ……すごい……こんなに太くて……)

恍惚としながらそちらに身を伸ばすシルヴィア。その背後から別の獸人が激しく彼女を突き上げる。甘い嬌声をあげながらもその肉棒に頬を寄せ、舌でチロチロと舐め上げる。その時、もう一人の人影が彼女と同じ様に、背後から犯されながらもふらりとこの肉棒に



顔を寄せてくるのに気がついた。この場にいる彼女以外の女性といえは一人しかいない。朝霞だ。ぼんやりと悦楽に染まった表情で肉棒を舐め上げている。シルヴィア同様、多数の獣人相手に犯され続けたのだろう。上気して桜色に染まった顔から明るい紅茶色の頭髮に至るまで、粘液と白濁液によってドロドロに覆いつくされている。

彼女はまだシルヴィアの存在に気付いていないらしい。一心不乱に己の顔よりも大きい肉棒に愛撫を続けている。

「あ、朝霞……」

思わず語りかけるシルヴィアの声に閉じられていた朝霞の瞳が開く。半ば悦楽に酔った様などろんとした黒い瞳が金髪の少女の姿を捉えた。

「あ……シルヴィ……」

うっとりとした熱にうかされた様な調子でシルヴィアの名を呼ぶ。

「あさ……かあ……だ……じょうぶ……？」

その様子を見ると、自分のことは棚に上げて尋ねずにはいられなかった。それに対して茶髪の少女はにっこりと、だがどこか妖艶な笑みを返す。ふと、その蕩けきった瞳の中に理性の輝きが走ったかの様にも見えたが痺れた頭でははつきりとはわからなかった。それにその直後の言動によってそんな印象は吹き飛んでしまう。

「私は大丈夫よ……シルヴィも一緒にしょ……？ いっぱい気持ちよくしてもらって……」

ほらこども……ね……？ 舐めると気持ちいいわよ……」

そう言つて愛しそうに肉棒へ頬擦りをする少女。豊かな乳房を左右の手で寄せ、それに挟む様にして愛撫を続ける。

「んっ……あっ……ふう……んん……」

普段の彼女から想像もできない淫猥な姿。それを見ている内にシルヴィアの全身を満たしていた熱い肉欲がドクンと疼いた。

(わ……私も……)

思考が再び淫欲に満たされる。憑かれた様に行為を再開する金髪の少女。朝霞と同じ肉棒に奉仕していると考えただけで背筋がゾクゾクという快感に満たされる。

二人分の奉仕を受けて黒々とした逞しい肉棒がビクビクとうち震えた。

「へへへ……光栄だぜ、お嬢様二人に気に入ってもらえてよ……」

頭上から聞こえてくる声、それは先程の狼男だった。あえて自分からはなにもせず、二人の行為に身をまかせている。二人の少女もなにも言わない。ただひたすら肉棒を愛撫することに没頭している。

「あむうっ……んっ、んっ、んくうっ……」

「は……んあ……ちゅ……あつく……」

まるで無言の内に心が通じ合っているかの様なコンビネーションだった。朝霞が肉棒の



先端部を含んで口の中で転がせば、シルヴィアは下の袋の部分にまで舌を這わせ、吸いづく様に愛撫する。二人分の刺激を受けて、黒い肉棒はいまにも破裂寸前の如くパンパンに張って見えた。その震えが大きくなるにつれて二人の動きも激しくなつてゆく。

これを最後とばかりに二人の唇が、肉棒の裏スジ部分とエラ状になつた部分の裏側をも吸い上げる。

「ッ……とお!! い、いくぜっ……!!」

太い肉棒がビクンと一際強く跳ねた。同時にその先端から大量の精液が火山の噴火の様に放出される。それはさながら熱いシャワーの如く少女達に降り注いだ。

(ああ……熱うい……)

顔全体に降りかかる熱い液体。シルヴィアは恍惚とした表情でそれを受けとめていた。最後に一際強く肉棒が震え、白濁液の噴出が止まる。中に残つた液を吸い取る様に朝霞が先端部に吸いついてチュルルと吸い上げ、シルヴィアは表面を流れ落ちる白濁液を丁寧舐め取つていく。

(んん……おいしい……こんなに熱くて……ドロドロしてる……)

生臭く、苦いはずの精液の味でさえ、甘美なものに感じられる様になつてしまつていた。舌全体を使ってさらに大胆にツルリとした表面を舐め上げるとピクピクと肉棒が震え、その硬度が増すのが感じられる。そのままさらに強く舐め上げようとした時、狼男の手がそ

つと頭に添えられた。ゆつくりと、しかし有無をいわせず肉棒から頭が引き離される。朝霞もまた、彼女と同じ様に恍惚とした表情のまま肉棒から引き離されていた。

「……？」

いぶかしげに狼男の顔を見上げるシルヴィア。それに気がついたのか、獣の顔にニヤリとした笑いが浮かんだ。

「まったくそんなに艶っぽい顔しやがって……また我慢できなくなるじゃねえか」

そのままクイッと身体を押しやられる。すっきり力の抜けてしまった身体ではもう踏ん張ることはできない。ドサッと音を立てて床に横倒しになってしまった。

すぐ前を見ると同様に押し倒されたと思われる朝霞の顔。同じ様にこっちの方をぼんやりと見つめている。その背後に浮かび上がる無数の影。倒れたふたりの周りを何重にも取り囲む様にして、獣人達の輪ができあがろうとしていた。

「さあ、それじゃあここでもう一度仕切り直した。今度は順番に、全員で犯<sup>や</sup>ってやるよ」  
周囲でもその台詞に賛同する唸り声が次々とあがる。

まずは狼男の黒々としたシルエツトがずいっとのしかかってきた。

「そーいやお前と犯るのは初めてだな。見てろよ、たつぷりと満足させてやるぜ……」

そう言いながら狼男がシルヴィアの左足を抱えるように持ち上げ、開いた脚の間に身体を割り込ませてくる。俗にいう側位の体勢だ。身体がねじれて横になる。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**